

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター訪問

今年度の重点課題である「生団連災害情報ネットワーク」の構築に関連し、兵庫県神戸市にある、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」にて施設見学とインタビューをさせていただきました。

五感で学ぶ自然災害

震災追体験

最初に足を踏み入れたのは、1.17 シアター。目の前に広がる凄まじい映像と音を通じて、震災の悲惨さをまざまざと感じます。上映が終わると、私たちが足を踏み入れるのは、ジオラマで忠実に再現された地震直後の街です。

建物は傾き、電線は垂れ下がり、炎が上がって、遠くからは何かが崩れるような音が聞こえてきます。



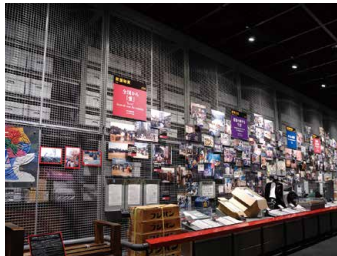
人と防災未来センター外観

人と防災未来センターとは

阪神・淡路大震災後、「将来の災害対策に資するものをつくりたい」という地元の声から、2002年に生まれた施設。大震災の教訓を活かし、災害文化の形成、地域防災力の向上、防災政策の開発支援を図り、安全・安心な市民協働・減災社会の実現に貢献することをミッションとしています。世界的な防災研究の拠点でもあり、災害全般への対策の発信・研究者の育成に取り組んでいます。

震災の記録

ここでは、被災された方々それぞれのストーリーを知ることができます。写真や手紙、玩具や生活用品などが展示され、タブレットや専用アプリを使って、ひとつひとつの展示品にまつわるエピソードを知ることができます。



津波避難体験

水と減災について学ぶフロアにある、津波避難体験コーナー。水の中を歩くことがいかに困難かを体験します。歩行装置に乗り、津波の水圧がかかる際の歩行への負荷を感じることができます。(実際には水は出ません。)目の前のスクリーンに映像と水位が映し出され、避難タワーへと急ぎますが、あまりの水圧になかなか足が前に出ません。身をもって事前避難の大切さを感じました。



副センター長 坂本 誠人様にお話を伺いました

Q 平常時には、災害に備えてどんな活動をされていますか？

A センターでは、若手の防災専門家を育成するため、常勤で3~5年雇用し、被災自治体の災害対応に役立つ様々な研究を行っています。また、所属する研究員が、全国の地方自治体の職員や首長向けに研修を行っています。企業の防災研修にも当センターをご利用いただいています。

Q 発災時には、どのように被災地支援をされていますか？

A 例えば地震であれば、震度6弱以上で研究員・幹部職員が集まり、情報収集を開始します。被災自治体では災害対応経験者がいない場合が多いので、被災地の災害対策本部に研究員が出向いて、どういう対応をすることが望ましいか、時間経過とともにどのような問題がでてくるかなどを踏まえ、助言を行っています。大阪北部地震、西日本豪雨、胆振東部地震の際も研究員を派遣しました。

Q 現在、生団連では「生団連サプライ」での物資支援を構想していますが、物資支援についてどのように考えていますか？

A 今後、南海トラフ地震のような広域的な災害が起きれば、各企業が個別に支援をするだけでは、物資を行き届かせることが難しくなります。そういった時に備えて、まずは各自治体の備蓄を強化していかなければなりません。そして発災時には、各企業同士、地方自治体同士が協力して物資を動かしていく必要があります。物流の確保も含めて準備・検討していく必要があります。